

# 団栗

## 映画文学人生論

原作：寺田寅彦 (1908) 「ホトトギス」  
参考：『天災と国防』 (1938) 岩波新書  
『科学と文学』 (1948) 角川書店  
『柿の種類』 (1933) 小山書店  
『藪柑子集』 (1949) 岩波文庫

暮れもおし詰まった二十六日の晩、妻は下女を連れて下谷摩利支天の縁日へ出かけた

寺田寅彦は、夏目漱石の小説で『吾輩は猫である』の水島寒月や『三四郎』の野々宮宗八のモデルとされている。首縊（くく）りの力学や光線の圧力を研究する科学者だが、吉村冬彦、藪柑子などの筆名をもつ文学者で、小説も書いている。

『団栗』は「ホトトギス」明治三十八年四月に掲載された短編小説。「もう何年前になるか思いつけぬが日は覚えている。暮れもおし詰まった二十六日の晩、妻は下女を連れて下谷摩利支天の縁日へ出かけた」という書出しだ。そして、「青い顔をして机のそばへすわると同時に急に咳（せき）をして血を吐いた」。

あくる日下女が急に暇をくれと言い出した。当時、肺病（結核）は不治の病とされており、「ホトトギス」の正岡子規や『不如帰』の浪子も若くして肺病で死んでいる。伝染のおそれがあるというので、国元の親が引き取りにきた。

途方にくれた夫は、車屋のばあさんに頼んで、なんでもよいからと桂庵（けいあん）から連れて来てもらったのが美代という女。これが気立てのやさしい正直もので、たすかった。少しぼんやりしていて、手水鉢を座敷のまん中で落としたり、火燵のお下がりを入れて寝て蒲団から畳まで焼け穴をこしらえるなどのしくじりもやったが、忠実に病人の看護をしてくれた。



## 団栗

映画文学人生論

二月中旬の風のない暖かい日、医者 of 許可を得たから植物園へ連れて行ってやると言うとき妻はたいへんに喜んだ。

出口のほうへと崖の下をあるいていると、「おや、どんぐりが」と不意に大きな声をして、熱心に拾いはじめた。「もう大概にしないか、ばかだな」と言ってみたが、やめそうもない。いったいそんなに拾って、どうしようと言うのだ」と聞くと、おもしろそうに笑いながら、「だって拾うのがおもしろいじゃないか」と言う。

どんぐりを拾って喜んだ妻も今はない。お墓の土には苔（こけ）の花がなんべんか咲いた。ことしの二月、あけて六つになる忘れ形身のみつ坊をつれて、この植物園へ遊びに来て、昔ながらのどんぐりを拾わせた。こんな些細（ささい）な事にも、遺伝というようなものがあるものだから、みつ坊は非常におもしろがった。どんぐりのすきな事も折り鶴（づる）のじょうずな事も、なんにも遺伝してさしつかえはないが、悲惨であった母の運命だけは、この子に繰り返させたくないものだと、しみじみそう思った、という話である。

そういえば、『吾輩は猫である』の寒月には縁談があった。妻がいるなら、金田鼻子が娘との縁談を持ち込むことはない。猫の運命も違ったものになったなどと考えてみるも愚かなり。

幸ありて桃の若葉と照り栄えよ